

29	奈良女子大学附属小学校	4～7
----	-------------	-----

令和4年度研究開発実施計画書

1 研究開発課題

様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く子どもを育成するため、自らの生活を語り発表する「かがやく時間」を新設し、力強く自分の考えを伝えようといえる言語能力を育成する教育課程を研究開発する。

2 研究の概要

本研究は、学習指導要領総則の第2の2－(1)に示された学習の基盤となる資質・能力のうち、言語能力の効果的育成を目指す教育課程を研究開発することをめざす。具体的には、新教科「かがやく時間」を設定し次の4点について研究を進める。①教科書の文脈ではない子どもの文脈を重視したパフォーマンス課題の学習により、効果的に言語能力を育む。②一人ひとりの学びの文脈を重視することで「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を涵養する。③「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換をはかり、そこでの効果的な指導法を究明する。④国語科を中心とした教育課程全体の授業時数を削減しつつ、効果的に言語能力を育む新教科「かがやく時間」の教育課程を明確にする。

3 研究の目的と仮説等

本研究の目標は、「現在十分になされていない言語能力の効果的育成を目指す教育課程を開発し、その効果を確認すること」である。この目標の達成のために「かがやく時間」を新設し、そこにおいて次のような目的を設定する：

- 目的1.** 一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視したパフォーマンス課題を設定することで、効果的に言語能力を育成できることを確認する。
- 目的2.** 一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視するからこそ、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」などの学びに向かう力・人間性が涵養されることを確認する。
- 目的3.** 一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視した「かがやく時間」の学習で、「考えてから教わる学習」の効果的な指導法を究明する。
- 目的4.** 「かがやく時間」の学習では、教科横断的なトピックを通して言語能力育成に寄与し、その結果として従来の国語科の内容のおよそ40%を削減する他、全教科を合わせた総時間が削減できることを確認する。

(1) 研究仮説

本研究では、言語能力を効果的に育む新教科「かがやく時間」を設定する。言語能力の育成は、「国語科を中核としつつ、全ての教科等での言語の運用を通じて論理的思考力をはじめとした種々の能力を育成するための道筋を明確にしていくことが求められる（言語力育成会議資料5）」とされてきた。しかし、国語科の学習指導の中で、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の指導を充実させることができず、結果的に十分な言語能力を育成できていないことや、言語の運用を通じて教科横断的に言語能

力を育むことも十分な成果をあげられているとは言えないことが指摘されている現状に鑑みれば、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」を国語科から移管し、必然的に教科横断的な学びを展開できる新教科として扱うことが相応しいと考えている。この新教科「かがやく時間」について、以下の4つの仮説を設定して研究開発を進める。

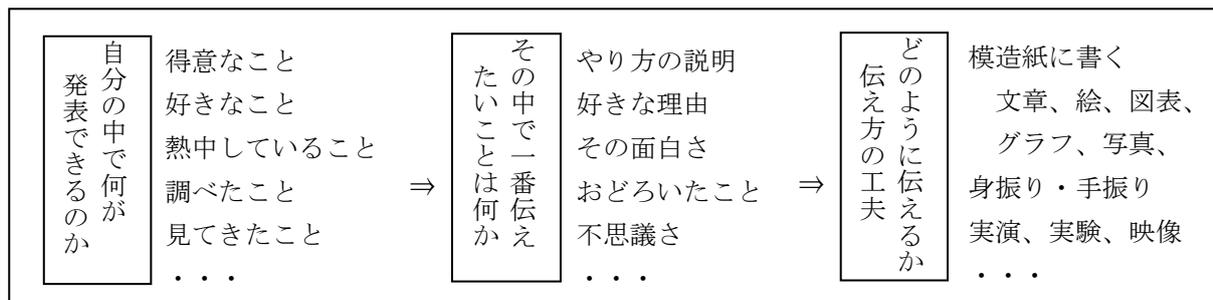
仮説1

「学びの文脈を伝える言語能力」「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」の育成のためには、「学びの文脈を伝えるパフォーマンス課題」を設定し、反復して自分らしさを表現することに取り組み続けさせることが有効である。

仮説1の「言語能力」の育成は、次の2段階から成り立っていると考えられる。

第1段階：

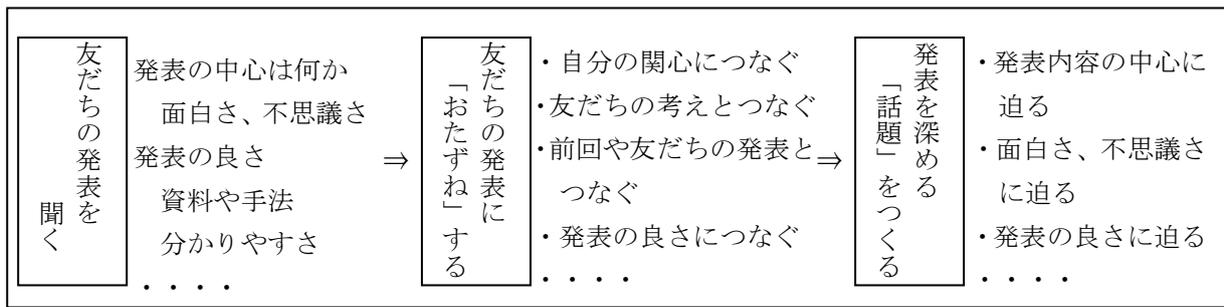
一人ひとりの子どもの学びの文脈を伝えるパフォーマンス課題として、例えば低学年の「自己紹介」「宝物を紹介しよう」や中学年以降の「最近、ぼくが気になっていること」「自由研究発表」などを想定している。こうしたパフォーマンス課題に取り組む中で、子どもたちは次図で示されるプロセスを経て言語能力を高める学びを重ねていくと考えている。



子どもたちは、まず、自分の中で発表できることは何かを見つめる作業を始める。そして、発表できそうなことの中で何を伝えるのかを探り始める。時にはこれまでに知っていることに加えて調べたり、資料を集めたり、試してみたりと様々に探究活動も行う。その過程で自ずと言語活動も活発になり、語彙等も増えていくに違いない。「僕は、大好きな恐竜のことを発表しよう。恐竜が生きた時代は中生代白亜紀だから…」と、曖昧であった知識を確認して語彙や知識も増やしていく。友だちが知らないことを発表するのだから、正しく分かりやすく伝えたいという意識も働く。発表するために、模造紙にまとめたり実演や実験の準備をしたりするかもしれない。一人に一台配付されたICT機器を調査や表現のツールとして活用する子も出てくるだろう。実際の発表に向けては、身振り手振り、絵や図表を使う、実演・実験を交えるなど、より分かりやすい発表へ向けてのシミュレーションや練習も重ねていくことになる。こうした学びの中で「学びの文脈を伝える言語能力」を育んでいく。

第2段階：

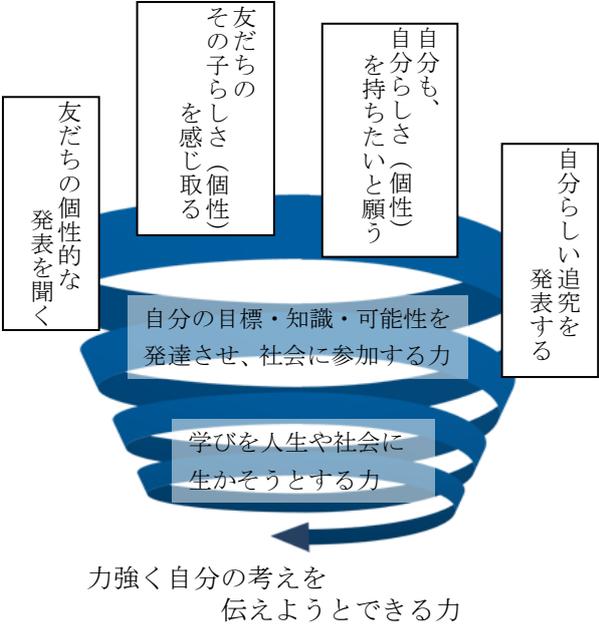
十分な準備を重ねた友だちの発表を聞くことは、他の子どもたちにとっても楽しい学習となる。そして、その発表を聞いた後に自分たちが「おたずね」をし、そのことによってさらに発表されたことが深まったことを実感できるようにすることがとても重要だと考えている（次図）。



本校では、子どもも教師も、発表や話の後に「おたずねはありませんか」という言葉を盛んに使う。一般的に使われる「質問」が硬い雰囲気という言葉であるのに対し、「おたずね」は子どもの学びの世界から生まれた応用力のある優しい言葉だからである。

子どもたちは、友だちの発表を興味津々で聞く。その際には、自分がその発表に「おたずね」をすることを想定して発表を聞く。自分が「おたずね」できるためには、聞きながら発表の中心や発表の良さを意識することが重要である。「おたずね」するにあたっては、自分の関心とつなげたり友だちの考えにつなげたりその発表の良さにつなげたりと、様々なことにつなげることも意識させたい。こうしたことを意識づけながら、その友だちの前回の発表や別の友だちの発表、さらには他教科の学習内容などと、その日の発表内容を俯瞰して「おたずね」できる力を育てていく。「おたずね」とその応答によって、内容を深めていくことへの意識も重要である。そのためには、発表内容の中心、その発表の面白さや不思議さ、発表の良さなどに迫る話題を形成していくことも意識させたい。こうした学びの中で「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」を育てていくことができると考えている。

仮説 2
 一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視した学びの反復で、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を涵養することができる。



仮説 1 で設定したパフォーマンス課題に取り組むことで、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を育むことができると考えている。その理由は次の通りである。

子どもたちは、友だちの個人的な発表を聞くことで、一人ひとりの「その子らしさ(個性)」を見つめていく。そして、それぞれの友だちの良さに気づく中で、自分も、「自分らしさ(個性)」を持ちたいという願いを強くしていく。そして、「自分らしさ(個性)」を見つめる個人的な追究に取り組む発表しようとする経験を重ねる。同時に、子どもたちは今の自分の個性がどのように、これからの人生や社会と関連するのかに気づくこともできる。

こうした経験の積み重ねの中で、子どもたちは少しずつ自分への洞察を鋭くし「自分らしさ」に磨きをかけていく。だからこそ「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」などの学びに向かう力・人間性等を育み、「力強く自分の考えを伝えよう」とできる」言語能力を、効果的に育成することができると考えている。

これらの積み重ねの根本には、幼児期の教育も大きく影響してくると考えられる。1対1の対話から1対多の対話へ、また自己中心的思考から客観的思考へと変容していく幼児期において、周囲の大人や友だちの助けを借りながら、自分の考えを言語化する経験の中で、学びの連続性を捉えることが「力強く自分の考えを伝えよう」とできる」言語能力の育成につながると考えている。

仮説3

「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換を実現することで、効果的に言語能力を育む指導法が究明できる。

平成27年に国立教育政策研究所から出された「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」の中で、「子供は失敗から学ぶ力を持っている（生産的失敗法）」という教育手法について報告されている。「子どもは教えないと考えることはできないのか」との疑問から行った実験の結果として、「考えてから教わるクラスでは、教わってから考えるクラスより、概念を深く理解し、応用問題で優秀な成績を収めた」ことが報告されている。必要な知識を教えてから考えさせるよりも、教わる前に自分たちで考え、その上で必要なことを教わった方が概念を深く認識できることが示されているのである。

仮説1で設定したパフォーマンス課題での発表は、予め必要な学習内容を教わってから考えられたものではない。子どもが考えた発表内容に合わせて、学級として学び取るべきことを教わる学習を実現することができれば、予め必要事項を教わってから考える学習よりも、より深い概念理解が得られると考えられる。

「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換を目指すにあたっては、発表内容に合わせて学び取るべき能力を抽出し、その能力の指導系統を明かにしていく必要がある。研究の過程で明らかにすべき能力ではあるが、例えば次のような能力を想定している。

- ・伝えたいことの内容を捉える。
- ・伝えたいことの内容の構造を俯瞰する。
- ・伝えるために必要な情報を収集する。
- ・情報を正確に理解し必要な事を取り出す。
- ・分かりやすく伝えるために、必要な資料や手法を選択する。
- ・伝えたいことの内容を組み立てる。
- ・組み立てた論を効果的にプレゼンテーションする。
- ・算数科、理科、社会科など様々な領域から、必要な概念を見つけ出す。
- ・既得の知識や経験と結びつけて分析・評価し、自分の考えを練り上げる。

これらの能力の指導系統を明かにするとともに、子どもたち自身が自覚的にこれらの能力に迫っていくことができる指導法を究明していきたいと考えている。

仮説4

「かがやく時間」の学習は、教科横断的なトピックを通して言語能力育成に寄与し、その結果として従来の国語科の年間授業時数のおよそ40%を削減する他、総授業時数を削減することが可能である。

仮説1で設定したパフォーマンス課題においては、それぞれの子どもが自分の文脈に沿った追究を進め、その結果を発表していく。発表の内容は、子どもの遊びの延長であったり知的好奇心に基づくものであったりと多岐にわたるため、必然的に理科的な分野や算数的な分野や社会的な分野など、多方面での教科横断的な学びが展開できる。年間を通しての発表内容を分析し、教科横断的に取り組む内容や他教科から削減する内容の検討を進める。

具体的には、仮説3に例示した言語能力に関する内容の他、「表とグラフ」等の統計資料を扱う内容、自然観察や実験を扱う内容、訪れた場所の地理等を扱う内容など、毎年必ず発表内容として現れるものを抽出し整理することで、他教科から移行できる内容や教科横断的にカリキュラムマネジメントする内容を検討する。

(2) 必要となる教育課程の特例

第1～4学年では「国語」科の内週3時間を削減し、週2時間の新設教科「かがやく時間」を設置する。また、第5・6学年では「国語」科の内週2時間を削減し、週1時間の新設教科「かがやく時間」を設置する。第1～6年の全ての学年において、総時間数を週1時間することになる。

(3) 研究成果の評価方法

①「力強く自分の考えを伝えよう」とできる言語能力」の評価課題の実施

子どもの「力強く自分の考えを伝えよう」とできる言語能力」の深化、発展を検討するために、評価課題（アチーブメントテスト等）を作成し、実施する。

②実践・活動状況調査

本研究における実践や活動状況（パフォーマンス課題の内容、学びの文脈を伝える言語能力、文脈を受け止め深化発展させる言語能力、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」等、学びに向かう力・人間性等）の検討に向けて、随時、実態調査や授業の記録を実施しその分析を試みる。その内容については、本校が年4回発行している「学習研究」誌に掲載する。

③研究開発の遂行に関する評価

研究課題である「様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く子どもを育成するため、自らの生活を語り発表する「かがやく時間」新設し、力強く自分の考えを伝えよう」とできる言語能力を育成する教育課程を研究開発する。」が適切に進んでいるか検討するために、年1回公開研究会を開催し、教育研究者や他小学校の教師などに検討していただく。

④運営指導委員会による評価

年度ごとに2回の運営指導委員会を開催し、研究の達成状況や課題などについて評価および指導を受ける。

4 研究計画等

(1) 教育課程の内容等

①「かがやく時間」の教育内容・方法について

「かがやく時間」は、主に「学びの文脈を伝える言語能力」および「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」を育成することを目指す学習の場としたい。具体的には、第1学年～第4学年には週2時間、第5学年および第6学年には週1時間の「かがやく時間」を新設し、子ども一人ひとりが自分の進めたい学びを見つけ出して発表するパフォーマンス課題を実施して学習を進める。具体的なパフォーマンス課題については、次のような内容を想定している。

- ・低学年…自己紹介、ぼくのわたしの得意な物、宝物を紹介しよう、自由研究発表
- ・中学年…最近気になっていること、自由研究発表
- ・高学年…自由研究発表

これらのパフォーマンス課題を、学年や学級の発達段階を考慮して適切に実施しながら、言語能力育成に相応しいパフォーマンス課題の内容や指導方法についての研究を進める。

②パフォーマンス課題の実施で育む言語能力の指導系統について

パフォーマンス課題の実施により育むことができる言語能力について、その指導系統の究明に取り組む。初年度はまず、次の2点についてその指導系統の究明に着手する。

a. 「学びの文脈を伝える言語能力」について、言語能力の内容を分析して類型化し、その各種能力の指導系統の究明に着手する。現時点で想定している類型を例示する。

- ・自分の中にあるみんなに伝えたいことを見定める言語能力
得意なこと、好きなこと、熱中していること、調べたこと、見てきたことを核に
- ・伝えたいことを中心を見定める言語能力
説明方法、好きな理由、面白さ、驚いたこと、不思議さを核に
- ・効果的な伝え方を見定める言語能力
文章、絵、図表、グラフ、写真、身振り手振り、実演、実験、映像を核に

b. 「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」について、言語能力の内容を分析して類型化し、その各種能力の指導系統の究明に着手する。現時点で想定している類型を例示する。

- ・文脈を受け止める言語能力
発表の中心を見定める…面白さ・驚き・不思議さ等
発表の良さを見定める…資料や手法の効果・分かりやすさ等
- ・「おたずね」できるための言語能力
自分の関心につなぐ、友だちの考えとつなぐ、前回の発表とつなぐ、発表のよさにつなぐ等
- ・発表を深める「話題」を形成する言語能力
発表内容について、中心を明確にする・新たな疑問を見出す・違った視点から見つめ直す等の「話題」を形成する

また、「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換の実現に向けて、子どもたちの学び合いの中にある「教える」べき内容についての究明にも着手する。子どもたちの学び合いの中に見出すことができる良さとして、現時点で次のような内容を想定している。

- ・伝えたいことの中心を捉える。
- ・伝えたいことの構造を俯瞰する。
- ・伝えるために必要な情報を収集する。
- ・情報を正確に理解し必要な事を取り出す。
- ・分かりやすく伝えるために、必要な資料や手法を選択する。
- ・伝えたいことの論を組み立てる。
- ・組み立てた論を効果的にプレゼンテーションする。
- ・算数科、理科、社会科など様々な領域から、必要な概念を見つけ出す。
- ・既得の知識や経験と結びつけて分析・評価し、自分の考えを練り上げる。

子どもの学び合いの中から見出せそうな「良さ」を、予め想定し指導系統を明かにすることにより「考えて教わる学習」への転換の具体的指導法の究明に着手したい。

③学びに向かう力・人間性等の涵養について

今回の研究課題では、言語能力を効果的に育成することを主眼としている。しかし、一方で、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」や「学びを人生や社会に生かそうとする力」と言った学びに向かう力・人間性等を涵養することは、言語能力育成の前提として重視すべきことだと捉えている。この学びに向かう力・人間性等について、次のような視点で研究に着手したい。

- ・ 「かがやく時間」のパフォーマンス課題を実施した結果、発表者を中心とする児童の行動の変容に関する情報を収集する。
- ・ 具体的には、発表内容に関わる追究や行動の現れを、日常生活の観察や日記への記述等により収集する。
- ・ 発表内容を継続的に記録し分析することにより、学びの文脈を深化の様相を捉える。

④附属幼稚園からの入学者とその他の入学者の比較について

本附属小学校は、隣接する附属幼稚園と幼小一貫教育を目指した取り組みを続けてきている。つまり、附属幼稚園でも園児の言語能力を効果的に育むような、園児の生活経験をみんなに伝える活動に取り組んできている。そこで、附属幼稚園からの入学者と外部からの入学者を比較し、言語能力の育成や学びに向かう力・人間性等の涵養について検討していきたい。

⑤育むべき言語能力と教科横断的に削減できる内容の検討

本研究の目的のひとつに、国語科の内容のおよそ40%の削減と、全教科を合わせた総時間の削減の可能性を確認することがある。そのため、次の情報を収集し分析することに着手する。

- ・ 「学びの文脈を伝える言語能力」および「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」を構成する、言語能力の内容を検討する。
- ・ そのため、パフォーマンス課題で発表された内容について、次の3点について収集すべき内容を検討する。
 - ・ a「文脈を伝える」ために必要な言語能力および「文脈を受け止め深化発展させる」ために必要な言語能力の具体的な内容を類型化する。
(自分の中で発表できるものを見つける力、一番伝えたいことを考える力…等)
 - ・ b 発表内容の類型(科学実験系、自然観察系、旅行・発見系、見学・体験系、工作・表現系…等)を検討する。
 - ・ c 発表の手法による類型(実演、統計処理的な図表を使う、地理的・歴史的資

料を使う、模型・工作等による表現を使う…)を検討する。

- ・ a～cにより類型化された内容と各種言語能力の関連を検討する。
- ・ 国語科をはじめとする各教科の中で削減できる内容の検討の準備を進める。

⑥公開研究会の開催について

本校では、毎年継続して公開研究会を開催してきている。これら公開研究会において、研究開発の1年次の成果を発表し参会者からの評価を得ていきたい。

(2) 全課程の修了認定の要件

(3) 年次研究計画

第1年次	<p>(1) 「かがやく時間」を全学年に新設し、ここにおいて各種のパフォーマンス課題を実施し、言語能力育成に相応しい課題の内容や指導方法についての研究を進める。</p> <p>(2) 「かがやく時間」における個の文脈に沿ったパフォーマンス課題による実践を分析し、育むことができる言語能力の「能力の指導系統」を究明する。</p> <p>(3) 「かがやく時間」の学びを通して、子どもたちに学びに向かう力・人間性等が涵養されていることを検証する。</p> <p>(4) 附属幼稚園からの入学者とその他の幼稚園などからの入学者について学びに向かう力・人間性等の違いを比較する方法を検討する。</p> <p>(5) 1年間のパフォーマンス課題による実践に現れた、他教科から削減できる内容や教科横断的に取り扱うことが相応しい内容を抽出し、教育課程全体の時数削減の検討を進める。</p> <p>(6) 研究開発の評価と成果発表のために、公開研究会を開催する。</p>
第2年次	<p>基本的に第1年次と同じ研究を行うが、1年次の計画を修正、拡充し、本格的に実施する。</p> <p>(1) 1年次に見定めたパフォーマンス課題や「能力の指導系統」について、学年間の発達段階を検討しながら引き続き「能力の指導系統」の検討を進める。</p> <p>(2) 1年次に作成した「能力の指導系統」をもとに、効果的に言語能力を育む指導法を究明する。</p> <p>(3) 子どもたちの学びに向かう力・人間性等について、1年生から6年生の涵養度を比較検討する。</p> <p>(4) 1年次に検討した、他教科から削減できる内容や教科横断的に取り扱うことが相応しい内容について、「かがやく時間」の中で実践できることを究明する。</p> <p>(5) 研究開発の評価と成果発表のために、公開研究会を開催する。</p>
第3年次	<p>上記研究計画(1)から(3)について、第2年次を引き継ぎつつその成果を参考に、より進展させた研究開発の確立とカリキュラム評価に向けた作業を行う。</p> <p>研究開発の評価と成果発表のために、公開研究会を開催する。</p> <p>他校での実施に向けた検討や評価、実践事例の公表、提言を行う。</p>

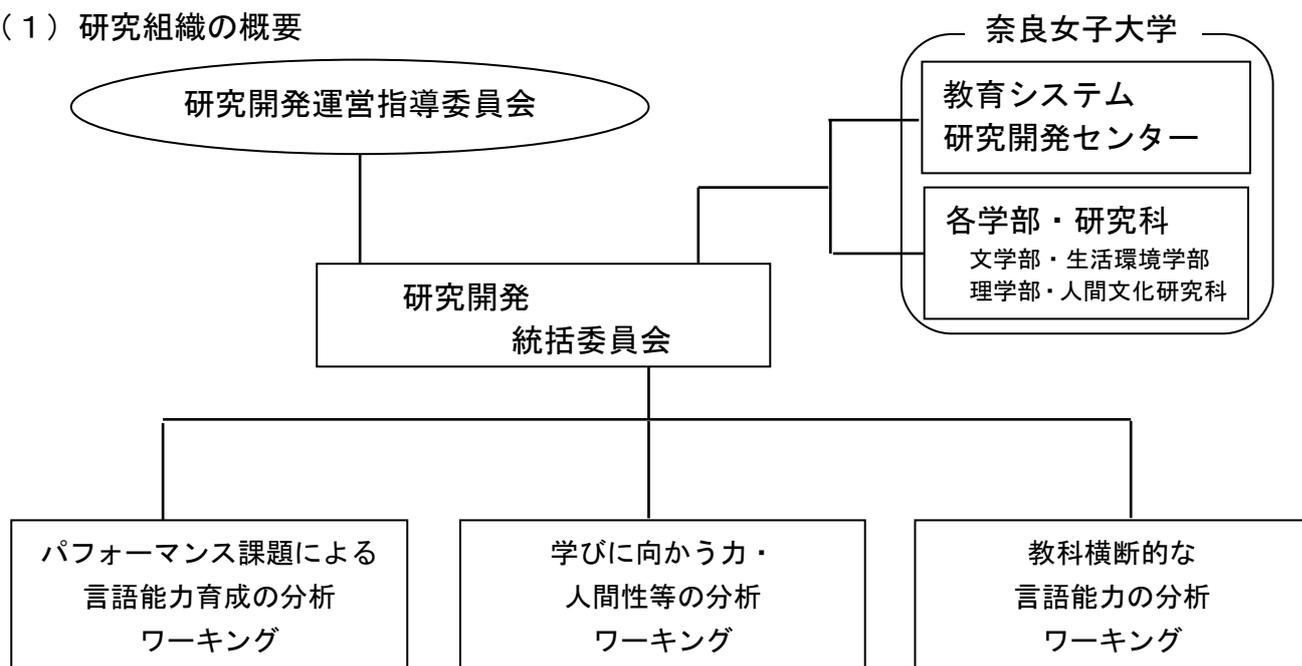
第4年次	<p>上記研究計画（1）から（3）について、第3年次を引き継ぎつつ、より進展させた研究開発とカリキュラム評価法を確立する。</p> <p>研究開発の評価と成果発表のために、公開研究会を開催する。</p> <p>他校での実施に向けた検討や評価、実践事例の公表、提言を行う。</p>
------	---

（4）年次評価計画

第1年次	<p>（1）「かがやく時間」に実施したパフォーマンス課題について、事例集を集積し、分析、検討し、適切なパフォーマンス課題についてアチーブメントテストを用いて評価する。</p> <p>（2）パフォーマンス課題の実施に伴う子どもの発表内容と、そこで育もうとした資質・能力についての事例を集積し、能力の指導系統を分析する。「学びの文脈を伝える言語能力」や「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」について指導系統を作成し、その妥当性について運営指導委員会を開催し評価を受ける。</p> <p>（3）子どもたちに、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」や「学びを人生や社会に生かそうとする力」などの、学びに向かう力・人間性などが涵養されていることを確認する評価課題（アチーブメントテスト等）を検討し、次年度以降に実施できるようにする。その内容について検討・評価する。</p> <p>（4）「かがやく時間」として実施した言語能力育成の効果を確かめる評価課題（アチーブメントテスト等）、「かがやく時間」としての言語能力育成の評価に備える。</p>
第2年次	<p>基本的に第1年次と同様の評価を実施するが、第1年次の評価結果に基づき、評価の内容の修正・調整を行い、本校を訪れる参観者や公開研究会運営指導委員会を通して評価を受ける。</p>
第3年次	<p>基本的に第2年次と同様の評価を実施するが、第2年次の評価結果に基づき、評価の内容の修正・調整を行い、本校を訪れる参観者や公開研究会運営指導委員会を通して評価を受ける。</p>
第4年次	<p>これまでと同じ内容の研究を行う。特に最終年であるので成果を、「効果的に言語能力を育む指導法」を他の学校で実践できるような形にまとめるので、それについて本校を訪れる参観者や公開研究会、運営指導委員会を通して評価を受ける。</p>

5 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

① 組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
奈須 正裕	上智大学	教授	教育心理学、動機づけ理論
富士原 紀絵	お茶の水大学	教授	教育方法学、教育実践史
西村 拓生	立命館大学	教授	教育人間学、教育哲学、教育思想史
石井 英真	京都大学	准教授	学力論、授業論、教育評価論
堺 隆宏	奈良県教育委員会	指導主事	
北村 拓也	奈良市教育委員会	指導主事	
成瀬 九美	奈良女子大学	教授	体育学、応用健康科学、スポーツ科学

② 活動計画

- ・ 自己評価に対する指導助言
- ・ 実践開発合同研究会における外部講師としての指導助言
- ・ 公開研究会支援

奈良女子大学附属小学校 教育課程表 (令和4年度)

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	204 (-102)	—	136	—	102	68	68	—	102	—	34	—	—	34	68	816 (-34)
第2学年	210 (-105)	—	175	—	105	70	70	—	105	—	35	—	—	35	70	875 (-35)
第3学年	140 (-105)	70	175	90	—	60	60	—	105	—	35	35	70	35	70	945 (-35)
第4学年	140 (-105)	90	175	105	—	60	60	—	105	—	35	35	70	35	70	980 (-35)
第5学年	105 (-70)	100	175	105	—	50	50	60	90	70	35	—	70	35	35	980 (-35)
第6学年	105 (-70)	105	175	105	—	50	50	55	90	70	35	—	70	35	35	980 (-35)
計	904 (-557)	365	1011	405	207	358	358	115	597	140	209	70	280	209	348 (+348)	5576 (-209)

※ 授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。